

「わかる授業」とメディア活用に関する教師の意識 (第一報)

「わかる授業」のためのメディア活用に関する研究プロジェクト
(附属教育実践総合センター)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部附属教育実践総合センター

A Research on Teachers' Thought of Instruction Prompting to Understand and Practical Use of Educational Instruments (I)

Research Project on Practical Use of Educational Instruments
for "WAKARU JYUGYOU" (e.g. Instruction prompting to Understand)

Center for Educational Research and Teacher Development,
Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要旨 本プロジェクトにおいては、「わかる授業」実践のためにいかにメディアを活用すればよいかについて、「わかる授業」に関する調査研究を基にしながら、メディア活用実践の整理と開発をすすめている。本研究では、平成20年3～5月に本学教育学部附属学校教員を対象に実施した質問紙調査結果を分析し、小学校、中学校、特別支援学校教員のメディア活用に対する意識、ならびに「わかる授業」に関する考え方について、検討を加えた。

キーワード わかる授業 メディア活用 教師意識

1. はじめに

教育において、「わかる授業」「さらに知りたい・わかりたいと思える授業」を展開することは、学力向上とともに、主体的に学び続け自らを高めようとする人材の育成という観点からも重要な課題である。

一方、文部科学省「教育の情報化に関する検討会」によれば、学校教育の情報化について「定量的指標では教育の情報化は遅れている」としながらも、「ITの質的な利用等についても重視すべきである」と述べられており、メディアを活用した教育実践の質的な向上と、教育効果の検討が求められているといえる。

そこで附属教育実践総合センターの平成19～20年度研究プロジェクトにおいては、初等中等

教育ならびに特別支援教育において、児童生徒が「わかる授業」(「さらに知りたい・わかりたいと思える授業」も長期的な視野に含める)を展開するためのメディア活用の在り方について、実践事例を基に検討を行うこととし、研究プロジェクト『「わかる授業」のためのメディア活用に関する研究プロジェクト』を立ち上げた。

平成19年度、本研究プロジェクトは、附属学校教員、本学部教員、香川県教育センターの方の参加を得、32名による研究プロジェクトとして研究を推進することとなった。研究プロジェクト検討会において、研究1年次として『「わかる授業」とは何か』『「わかる授業」の成立要素として、何を考慮する必要があるか』などについて、明確にしていくべきとの視点から討議

をすすめた。すなわち、「初めにメディアありき」の研究プロセスではなく、日々研鑽し実践ならびに実践研究を重ねている現職教員の有する「わかる授業」づくりの方法・技術等（成立要素）を整理し明らかにしながら、それら「わかる授業」成立要素を、より効果的な・質の高い教育実践に繋げていくための「メディア活用」の在り方について、実践研究をふまえて検討することとした。

また平成19年度の討議を通して、『「わかる授業」については、附属学校の先生方の視点や意見を幅広く得た上で、今後のプロジェクトを進めた方がよいのではないか』などの意見をふまえ、附属小学校・附属中学校・特別支援学校の教員を対象に質問紙調査を実施し、「メディア活用に対するイメージ」「『わかる授業』の成立要素・全体イメージ・評価観点・指導支援の配慮点」などについて、現職教員の有する意識・考え方を明らかにすることとした。

本報告においては、附属学校教員の「授業へのメディア（ICT機器）活用に対するイメージ」「メディアの活用経験と自信」ならびに、附属学校教員が考える『「わかる授業」の成立要素』について、当該質問紙調査によって明らかとなった知見を報告する。

2. 研究の方法

平成19年度、研究プロジェクト検討会ならびにメール会議を中心に、プロジェクトメンバーの間で質問紙調査項目を検討・精選し、質問紙調査用紙を作成した（本稿末の資料参照）。調査は、附属高松・坂出小学校、附属高松・坂出中学校、附属特別支援学校において実施し、実施においては、各校の本研究プロジェクトメンバーが実施・回収等を行った。質問紙調査にあたっては、負担のないタイミングでより有益な回答を得ることをねらい、各校の状況を勘案しながら平成20年3～5月に実施した。（有効回答数については、設問ごとにばらつきがあるため、次項「3. 結果と考察」の各設問の回答結果に併せて記す。）

3. 結果と考察

3-1. メディア活用に関する教師の意識

3-1-1. メディア（ICT機器）に対する総括的イメージ

まず、メディア（ICT機器）に対するイメージについて附属学校教員の意識を問う設問項目B1「メディア（ICT機器）に対するイメージについて、当てはまる箇所に○をつけてください」に対する回答結果を見ていく。本設問では、メディア（ICT機器）を「テレビ、VTR又はDVDデッキ、CDラジカセ、OHP、デジタルカメラ（以降図中にはデジカメと略記）、デジタルビデオカメラ（以降図中にはデジビデオと略記）、実物投影機（書画カメラ）、液晶プロジェクタ、パソコン、電子情報ボード、TV会議システム、インターネット」などを指すと定義した上で、

- ア. 授業での利用に興味がある
- イ. 設置や操作に不安がある（マイナスイメージ項目）
- ウ. 授業で使う自信がある
- エ. 使うのは手間がかかると感じる（マイナスイメージ項目）
- オ. 授業で使いたいと思う
- カ. 私にとって身近なものだと思う
- キ. 使えば、児童生徒がより「わかった」と思ってもらえる授業になりそうだと思う
- ク. 授業に活用しやすいと思う

の8つの視点について、教員のメディア（ICT機器）に対するイメージを「そう思う」から「そう思わない」までの5尺度で問うた。

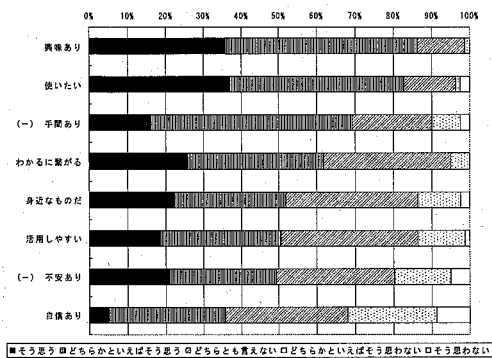
附属学校5校の教員の回答を示したグラフが図1である（有効回答数81名／グラフは「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の項目に対する回答を加えた割合が高い順に並べている）。メディア（ICT機器）の教育利用・授業活用について、「ア. 興味がある」「オ. 使いたい」との積極的な意識を持つ教員が8割を超えている。また「キ. わかるに繋がる授業になりそうだ」との印象を持っている教員も6割に

達しており、附属学校教員のメディア（ICT機器）の教育利用・授業活用意識は高いポイントを示している。これらより、総合的なイメージとしては、メディア（ICT機器）が「興味があり」「使いたいと思ひ」、授業で使うことによって「授業が『わかる授業』になる」との思いを附属学校教員の多くが有する傾向にあることがうかがえる。しかしながら一方では、メディア（ICT機器）を使うことに「エ. 手間あり」と感じる教員が7割近くを占め、また「カ. 身近なもの」「ク. 授業に活用しやすい」イメージを持つ教員は半数程度に留まり、設置や操作について「イ. 不安がある」と回答する教員が半数程度存在する。

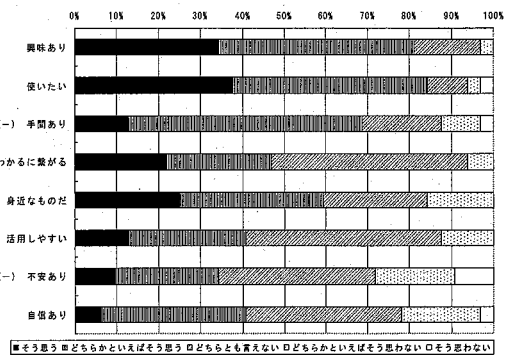
このように、メディア（ICT機器）の教育利用・授業活用に対する期待度が高い反面、「活用における手間」もあり「活用しづらい」「設置や操作上の不安がある」とのイメージもまだ

教員の中に高くあることから、「『わかる授業』のためのメディア活用」の促進にあつては、これらのマイナスイメージを克服する環境整備や校内研修等が求められるとともに、それらのマイナスイメージが表す心理的負担や労力にみあう、教育効果の高い「わかる授業」が実現できることを、具体的に示し伝えていく必要があると思われる。

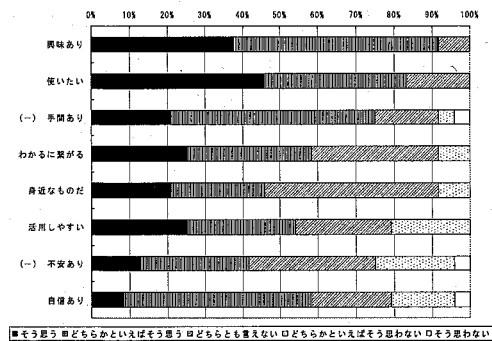
本設問に対する回答を、各校種別にまとめたグラフが図2-1～3である（有効回答数は小学校：32名、中学校：24名、特別支援学校：25名／グラフの項目順は図1と同じ）。各校種の回答傾向は、前述した全体傾向と大きな差は認められないが、特別支援学校については若干の傾向差が認められる。メディア（ICT機器）を授業において活用することによって、児童生徒が「キ. 『わかった』と思ってもらえる授業になりそうだ」との印象を持つ教員が8割を超え、



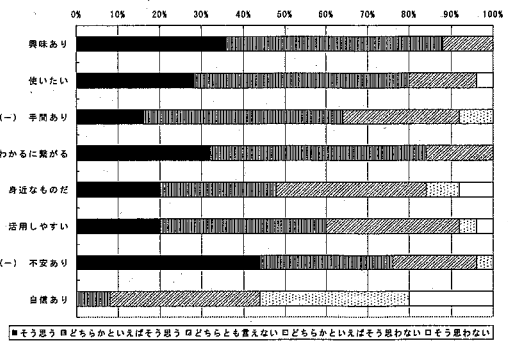
【図1】メディア（ICT機器）に対するイメージ
（5校計／有効回答数：81名）



【図2-1】メディア（ICT機器）に対するイメージ
（附属高松小十附属坂出小／有効回答数：32名）



【図2-2】メディア（ICT機器）に対するイメージ
（附属高松中十附属坂出中／有効回答数：24名）



【図2-3】メディア（ICT機器）に対するイメージ
（附属特別支援学校／有効回答数：25名）

メディア (ICT機器) を授業に「ク. 活用しやすい」との印象についても6割に達している。その一方、メディア (ICT機器) の設置や操作に「イ. 不安あり」の側に回答する教員は7割を超えており、併せて授業で使うことについては「ウ. 自信あり」の側に回答する教員が1割に満たない結果となっている。(この結果の解釈については、次項3-1-2の結果と併せて解釈する。)

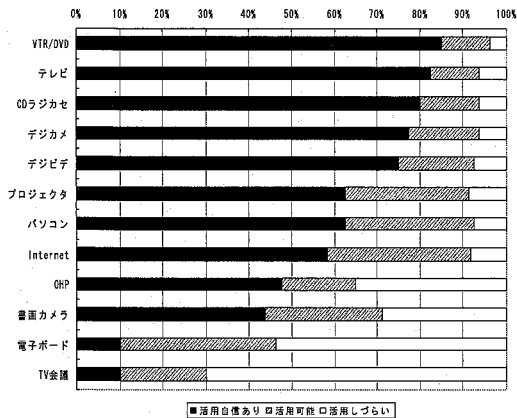
3-1-2. メディア (ICT機器) の授業活用経験と自信

次に、メディア (ICT機器) を授業に活用した経験と授業活用に対する自信について、メディア (ICT機器) の種別毎に問う設問項目B2「下記のメディア (ICT機器) について、現時点で『授業に活用したことがある』『活用する自信がある』ものに●、『授業に活用した経験や自信はないが、自分の授業にも活用可能だろう』と思えるものに○、『自分の授業には活用しづらいだろう』と思われるものに△を、それぞれに付けてください」に対する回答結果を見ていく。本設問においては、調査冒頭に例示した12のメディア (ICT機器) を対象とし、授業活用経験と授業活用に対する自信について、教員の傾向を大まかに把握することをねらい、設問文にあるように「活用自信あり (活用経験あり+自信あり)」「活用可能 (活用経験なし+自信なし+授業に活用可能)」「活用しづらい」の3尺度で回答を求めた。(なお、教員の回答しやすさも考慮し本設問を作成した。)

2008年3～5月現在における、メディア (ICT機器) に対する附属学校5校の教員の活用経験・自信について示したグラフが図3である (有効回答数: 80名)。この活用経験・自信の回答傾向から、大まかにメディア (ICT機器) を4群に分けることができる。まず、(A)「活用自信あり」が8割前後の高位を占めるメディア群として「VTR/DVD, テレビ, CDラジカセ, デジタルカメラ, デジタルビデオカメラ」が挙げられる。昨今の技術革新によってデ

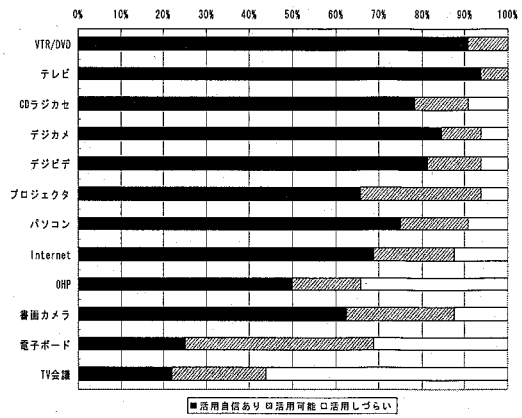
ジタル化されたメディア (ICT機器) が並んでいるものの、古くは視聴覚教育の時代から今日まで息長く活用されている、古参の教育メディア (ICT機器) であるといえる。次に、(B)「活用可能である」を含めた回答は9割を超えるものの、「活用自信あり」との回答が6割前後となっているメディア群が「プロジェクタ, パソコン, インターネット」である。教員には授業活用の可能性の認識が高い一方で、実際に活用したり、活用に自信があると明確に言える段階には達していないメディア群といえる。続いて、(C)「活用可能である」を含めた回答が7割程度・「活用自信あり」回答が5割程度を示すメディア群が「OHP, 書画カメラ」である。OHP (オーバー・ヘッド・プロジェクター) については、1960年代頃から日本の教育実践現場に取り入れられ積極的に用いられたメディアであるが、最近の新たなメディア (ICT機器) の教育実践における活用に伴い、息を潜めつつあるメディアである。主には、透明シート (OHPシート) に書かれた文字や図表などを光源上に置き、レンズ・鏡を経てスクリーンに投影する使用方法であるが、情報投影という点からは2群めの「プロジェクター, パソコン」に主流を譲り、あるいは現物を投影する機能から言えば、同一群の書画カメラへと、教員の「活用する自信」意識においても世代交代が行われつつあることを示す結果とも捉えられる。最後に(D)「活用自信あり」が1割程度に留まるメディア群が「電子ボード, TV会議」である。これらについては、学校現場への導入・普及台数が少なく、また教育実践研究の普及も十分にされていないメディア (ICT機器) 群であるといえよう。

本設問に対する回答を、各校種別にまとめたグラフが図4-1～3である (有効回答数は小学校: 32名, 中学校: 24名, 特別支援学校: 24名/グラフの項目順は図3と同じ)。小学校においては、全体傾向に比べてどのメディア (ICT機器) に対しても活用自信が高く、特に上述した(C)群・(D)群のメディア (ICT機器) の活用に対する自信のある教員が多かった



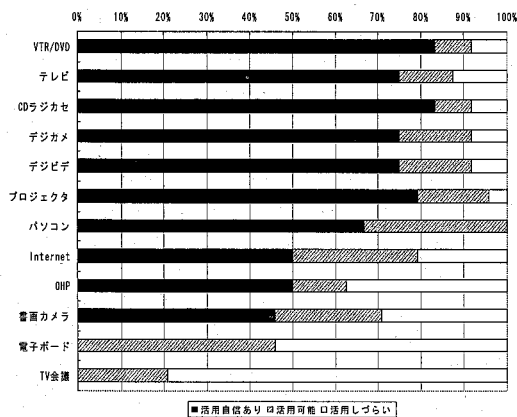
【図3】メディア（ICT機器）に対する2008/03～05月時点における「活用経験・自信」

(5校計/有効回答数:80名)



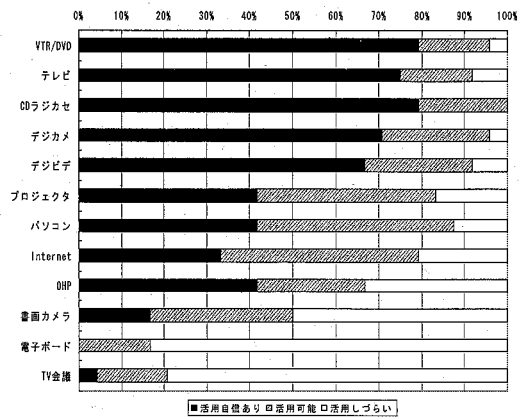
【図4-1】メディア（ICT機器）に対する2008/03～05月時点における「活用経験・自信」

(附属高松小+附属坂出小/有効回答数:32名)



【図4-2】メディア（ICT機器）に対する2008/03～05月時点における「活用経験・自信」

(附属高松中+附属坂出中/有効回答数:24名)



【図4-3】メディア（ICT機器）に対する2008/03～05月時点における「活用経験・自信」

(附属特別支援学校/有効回答数:24名)

活用経験もあることが見て取れる。中学校においては、プロジェクタの活用自信が比較的高い一方、上述(C)群・(D)群については、活用した経験のある教員はいなかった。

また、特別支援学校においては、上述(A)群と(B)群・(C)群との間で、教員の「活用経験・自信」の差が顕著に現れている。すなわち、{VTR/DVD, テレビ, CDラジカセ, デジタルカメラ, デジタルビデオカメラ}などの教育メディアについては活用経験・自信がある一

方、それ以外の、言わば新たなメディア（ICT機器）の活用経験・自信は、他校種に比べて低い数値を示す傾向にある。この結果については、前項3-1-1の結果を含め、特別支援学校における学習支援・生活支援の方法の特徴をふまえて解釈する必要があると思われる。特別支援学校においては、日常的に、絵カードや写真、音などを積極的に用いることによって、児童生徒の視覚・聴覚に働きかける学習・生活の支援・指導にあたり、教育効果を高める工夫を行っ

ている。またそれらの情報提示においては、VTRやCDラジカセが積極的に用いられ、1台のテレビを30～40人で観るといった視聴スタイルではなく、児童生徒の目の高さ程度に据えられた比較的大型のテレビを少人数で観ることが多い。併せて、児童生徒の体験の記憶を再現・再生したり、行為を促すなどの刺激情報として活用するため、児童生徒の活動を記録する場面等においてデジタルカメラやデジタルビデオカメラが積極的に用いられている。特別支援学校における前項3-1-1ならびに本設問の回答傾向は、メディア（ICT機器）を授業に活用することによって、児童生徒の視覚・聴覚に働きかけ、教育効果を高めることができそうだとの教員の期待を示すものであるとともに、メディア（ICT機器）の例に挙げた（B）・（C）・（D）群のメディア（ICT機器）の活用経験が少ないことから、図2-3に見られるように「イ. 設置や操作に不安がある」とのマイナスイメージが強く（約8割）、「ウ. 授業で使う自信」について、その値が低く現れる傾向に繋がっていることが想定される。

『わかる授業』のためのメディア活用の促進にあつては、これら教員の活用経験・活用の自信、ならびに各校種の特性を考慮した上で、活用するメディアやメディアの組み合わせ方を検討し、実践研究をすすめていくことが求められるといえよう。

3-2. 「わかる授業」成立要素に関する教員の意識

次に、「わかる授業」が成立するための要素に関する教員の意識を問う設問項目A2『わかる授業』が成立するための要素（児童生徒の状況・教師の教え方・学習環境の状況・教材etc.）を、順序に関係なく、思いっただけ挙げてください。に対する回答結果を見ていく。本設問においては、15個の回答欄を設け、ブレン・ストーミングの要領で、柔軟な思考・発想のもと、思いっただけ「わかる授業」の成立要素を列挙することを求める設問形態とした。

本設問の附属学校5校の教員の有効回答数は84名であり、644の項目が挙げられた。それらを挙げられた内容によってカテゴリー分類し、38の小カテゴリー（「そのほか」を除く）を設定した。なお、カテゴリー設定と分類妥当性の検討にあたっては、各附属学校の本研究プロジェクトメンバーが関わり、検討を加えた。また、小カテゴリーのうち、表現の差異によってさらにまとめられるカテゴリー、あるいは、具体的に書かれた内容を1つにまとめることのできるカテゴリーについては、大カテゴリーとしてまとめることとした。

これらの手続きを経て、カテゴリー分類した「わかる授業」成立要素に関する回答項目数を、各校種別にまとめたものが表1である。各校種に共通して数多く指摘されたカテゴリーがある（詳しくは後述）一方、特定の校種に多く挙げられた「わかる授業」成立要素の存在も認められる。例えば小学校教員からは、「わかる授業」が成立するためには、「子ども自身の学びとなっているか」「学習における体験性（実験や観察などを含む）」「集団の学びであるか」などの要素が、多数挙げられる傾向にある。これらの要素に対する小学校教員の思いが強いことがうかがえる。（ただし、各校種別の教員（有効回答数）一人あたりの平均記載項目数を見ると、小学校教員が9.4項目であることに対し、中学校教員は6.5項目、特別支援学校教員は6.4項目であることから、項目数のみからの各校種比較には危険性を伴うことを指摘しておくとともに、それゆえこの項においては、回答項目数の校種比較検討は以上の記述にとどめることとした。）

表1に示した各カテゴリーについて、「わかる授業」成立要素として、附属学校5校の教員から挙げられた項目数をまとめたグラフが図5である。「わかる授業」が成立するためには、「内容・教材・教具」の吟味・工夫が大切であるとともに、教材や提示情報の視覚化・間接経験教材化や簡略・具体化、焦点化・整理、繰り返し・反復などの「教師の指導技術」に関する項目が数多く挙げられている。また、学習者の

【表1】5校教員より挙げられた「わかる授業」成立要素の整理カテゴリーと回答項目数

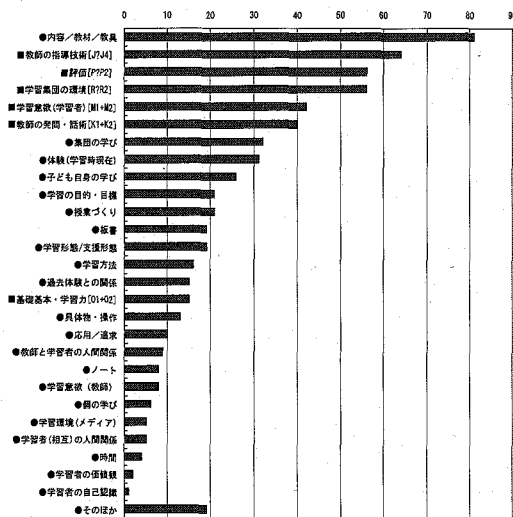
| カテゴリー 記号 | 「わかる授業」成立要素カテゴリー | 小学校 | 中学校 | 特別支援 学校 |
|-------------|--------------------|-----|-----|------------|
| A | ●子ども自身の学び | 18 | 3 | 5 |
| B | ●時間 | 3 | 1 | 0 |
| C | ●内容／教材／教具 | 36 | 23 | 22 |
| D | ●授業づくり | 6 | 7 | 8 |
| E | ●学習方法 | 9 | 3 | 4 |
| F | ●具体物・操作 | 5 | 3 | 5 |
| G | ●ノート | 4 | 2 | 2 |
| H1 | ●過去体験との関係 | 9 | 3 | 3 |
| H2 | ●体験（学習時現在） | 19 | 8 | 4 |
| I1 | ●集団の学び | 24 | 5 | 3 |
| I2 | ●個の学び | 6 | 0 | 0 |
| J | ■教師の指導技術 [J~J4] | 29 | 14 | 21 |
| J | ・教師の指導技術（一般） | 10 | 10 | 9 |
| J1 | ・＜視覚化＞（間接経験教材） | 4 | 3 | 11 |
| J2 | ・＜簡略・具体化＞ | 5 | 1 | 1 |
| J3 | ・＜焦点化・整理＞ | 8 | 0 | 0 |
| J4 | ・＜繰り返し・反復＞ | 2 | 0 | 0 |
| K | ■教師の発問・話術 [K1+K2] | 18 | 7 | 15 |
| K1 | ・発問 | 12 | 3 | 5 |
| K2 | ・話し方 | 6 | 4 | 10 |
| L | ●板書 | 10 | 4 | 5 |
| M | ■学習意欲（学習者） [M1+M2] | 23 | 9 | 10 |
| M1 | ・学習意欲（学習者） | 18 | 7 | 8 |
| M2 | ・学習意欲 [教師視点] | 5 | 2 | 2 |
| N | ●学習意欲（教師） | 2 | 4 | 2 |
| O | ■基礎基本・学習力 [O1+O2] | 7 | 5 | 3 |
| O1 | ・学習（能）力 | 6 | 3 | 2 |
| O2 | ・基礎基本 | 1 | 2 | 1 |
| P | ■評価 [P~P2] | 23 | 15 | 18 |
| P | ・評価 | 8 | 6 | 5 |
| P1 | ・学習者の状況把握（教師評価） | 11 | 7 | 11 |
| P2 | ・学習者の変容（自己評価） | 4 | 2 | 2 |
| Q | ●学習環境（メディア） | 3 | 1 | 1 |
| R | ■学習集団の環境 [R~R2] | 23 | 18 | 15 |
| R | ・学習集団の環境 | 7 | 11 | 13 |
| R1 | ・＜拡散＞ | 10 | 2 | 1 |
| R2 | ・＜収斂＞ | 6 | 5 | 1 |
| S | ●学習形態／支援形態 | 8 | 6 | 5 |
| T | ●応用／追求 | 6 | 3 | 1 |
| U1 | ●教師と学習者の人間関係 | 4 | 5 | 0 |
| U2 | ●学習者（相互）の人間関係 | 3 | 1 | 1 |
| V1 | ●学習者の自己認識 | 1 | 0 | 0 |
| V2 | ●学習者の価値観 | 2 | 0 | 0 |
| W | ●学習の目的・目標 | 9 | 3 | 9 |
| Z | ●そのほか | 10 | 4 | 5 |

（※注：小カテゴリーを大カテゴリーに統合した項目は、冒頭に■印を付している。以下同一表記とする。）

状況把握や学習者自身の学習成果の把握など「評価」に関する項目、また、「あたたかさ、楽しさ、互いに認め合う、豊かな発想ができる」といった拡散的側面とともに「学習規律、厳しさ、真理を求める風土、集中できる」など収斂的側面を備えた「学習集団の環境」が、「わかる授業」成立のために大切な要素として数多く挙げられた。

本設問に挙げられた回答項目について、各カテゴリーに属する回答項目を挙げた教員の割合で整理し直し、集計したグラフが図6である。(すなわち、同一カテゴリーにあてはまる複数の項目を回答した場合であっても、回答数は「1人」として集計し直し、各カテゴリーごとに回答した教員の割合を算出したものである。)これにより、順位の入替わりはあるものの、特に上述した「内容・教材・教具、学習集団の環境、教師の指導技術、評価」の4カテゴリー要素について、約6割の附属学校教員が、また「教師の発問・話術」「学習者の学習意欲」の要素について、約4割の教員が「わかる授業」が成立するための要素として重要であるとの認識を持っていることが明らかとなった。

ここで、各カテゴリーに属する回答項目を挙げた教員の割合で整理し直し集計した結果を、

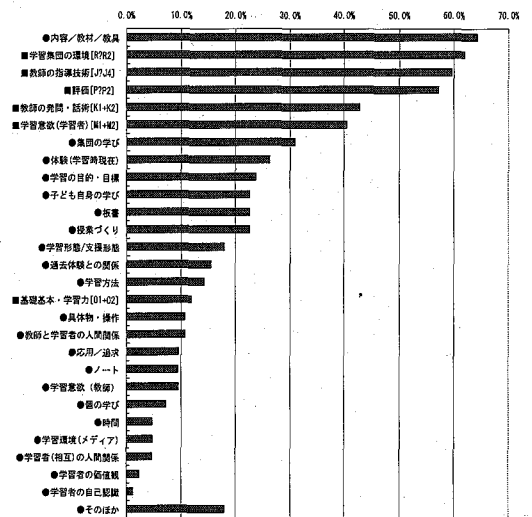


【図5】「わかる授業」成立要素の各カテゴリー回答項目数

(全回答項目数:644項目)

各校種別に表したデータを見てみたい(表2)。上位4カテゴリー要素が「わかる授業」成立のために重要であるとの認識があることは図5と共通して見取ることができるが、加えて、各校種ごとにカテゴリー要素の回答傾向にばらつきがあることが認められる。特に中学校においては、「内容・教材・教具」の吟味・工夫と「学習集団の環境」が重要であると7割の教員が指摘している。一方、小学校と特別支援学校には回答のばらつきが大きく、小学校においては上述した6つの要素に加えて「集団の学び」「体験(学習時現在)」「子ども自身の学び」の3要素を、一方、特別支援学校においては、「内容・教材・教具、教師の指導技術、評価、学習集団の環境、教師の発問・話術」の5要素に加えて「学習の目的・目標が明確かどうか」「授業づくりの工夫」の2要素を、多くの教員が「わかる授業」成立要素として挙げる傾向が認められた。

「『わかる授業』のためのメディア活用」の促進ならびに今後の実践研究にあたっては、これら学校教員が既に有している「わかる授業」が成立するために重要だと認識している各要素がもつ教育機能とその教育効果をより高めることを視野に含めながら、メディア活用の在り方を検討する必要があるといえる。



【図6】「わかる授業」成立要素の各カテゴリーに回答した教員の割合

(有効回答数:84名)

【表2】「わかる授業」成立要素の各カテゴリーに回答した教員の割合

(有効回答数/小学校:34名、中学校:24名、特別支援学校:26名)

| 「わかる授業」成立要素カテゴリー | 小学校 | | 中学校 | | 特別支援学校 | |
|--------------------|-----|-------|-----|-------|--------|-------|
| ●内容/教材/教具 | ※ | 64.7% | ※※ | 70.8% | ※ | 57.7% |
| ■学習集団の環境 [R~R2] | ※ | 61.8% | ※※ | 75.0% | ※ | 50.0% |
| ■教師の指導技術 [J~J4] | ※ | 64.7% | ※ | 54.2% | ※ | 57.7% |
| ■評価 [P~P2] | ※ | 55.9% | ※ | 62.5% | ※ | 53.8% |
| ■教師の発問・話術 [K1+K2] | * | 47.1% | | 29.2% | ※ | 50.0% |
| ■学習意欲(学習者) [M1+M2] | ※ | 55.9% | * | 37.5% | | 23.1% |
| ●集団の学び | ※ | 52.9% | | 20.8% | | 11.5% |
| ●体験(学習時現在) | * | 35.3% | | 25.0% | | 15.4% |
| ●学習の目的・目標 | | 23.5% | | 12.5% | * | 34.6% |
| ●子ども自身の学び | * | 35.3% | | 12.5% | | 15.4% |
| ●板書 | | 29.4% | | 16.7% | | 19.2% |
| ●授業づくり | | 14.7% | | 25.0% | * | 30.8% |
| ●学習形態/支援形態 | | 20.6% | | 16.7% | | 15.4% |
| ●過去体験との関係 | | 20.6% | | 12.5% | | 11.5% |
| ●学習方法 | | 17.6% | | 8.3% | | 15.4% |
| ■基礎基本・学習力 [O1+O2] | | 8.8% | | 20.8% | | 7.7% |
| ●具体物・操作 | | 11.8% | | 8.3% | | 11.5% |
| ●教師と学習者の人間関係 | | 11.8% | | 20.8% | | 0.0% |
| ●応用/追求 | | 11.8% | | 12.5% | | 3.8% |
| ●ノート | | 11.8% | | 8.3% | | 7.7% |
| ●学習意欲(教師) | | 5.9% | | 16.7% | | 7.7% |
| ●個の学び | | 17.6% | | 0.0% | | 0.0% |
| ●時間 | | 8.8% | | 4.2% | | 0.0% |
| ●学習環境(メディア) | | 5.9% | | 4.2% | | 3.8% |
| ●学習者(相互)の人間関係 | | 5.9% | | 4.2% | | 3.8% |
| ●学習者の価値観 | | 5.9% | | 0.0% | | 0.0% |
| ●学習者の自己認識 | | 2.9% | | 0.0% | | 0.0% |
| ●そのほか | | 20.6% | | 12.5% | | 19.2% |

(注:70%を超える項目に※※印、50%を超える項目に※印、30%を超える項目に*印を付している)

4. おわりに

本稿においては、本年3~5月に実施した質問紙調査の結果の一部を「第一報」としてまとめ、検討と考察を行った。本研究プロジェクトにおいては、本調査結果をふまえ、「わかる授業」とメディア活用の在り方に対する教員の意

識についてさらに調査検討を重ねるとともに、調査結果をもとに「わかる授業」成立要素をより効果的に機能させるメディア活用の在り方について、実践研究をすすめていきたいと考えている。

[謝辞]

本研究をすすめるにあたって、ご多忙な中、

調査研究にご協力いただきました附属学校教職員の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございました。

[参考文献]

大野連太郎・宮田高男編「シリーズ・新しい教育機器 1 オーバーヘッド・プロジェクター」明治図書, 1969.

大野連太郎ほか編者「OHPの活用」明治図書, 1972.
末武国弘・岸本唯博編著「OHPの活用とTP製作の実際」学習研究社, 1973.

文部科学省 初等中等教育における教育の情報化に関する検討会「初等中等教育における学校教育の情報化の今後の姿について（論点整理）」平成17年4月15日,

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/027/ronten/05051601.htm

「わかる授業」のためのメディア活用に関する研究プロジェクトメンバー

(各校メンバー登録名簿順)

<平成20年度>

松下 幸司 (香川大学教育学部 附属教育実践総合センター) / 高尾 明博, 小早川 覚 (以上, 附属高松小学校) / 林 雄二, 大東 ひとみ, 宮崎 彰 (以上, 附属坂出小学校) / 大林 克暢, 白井 和紀 (以上, 附属高松中学校) / 木谷 直充, 氏家 徹也 (以上, 附属高松中学校) / 小林 壽江, 西山 幸子, 森 正人, 西部 良二, 濱田 育代, 高木 俊彦, 多田 守, 近藤 邦子, 今井 孝治, 柳生 豪英, 宮本 妙子, 西村 健一 (以上, 附属特別支援学校) / 眞鍋 理, 今滝 純江 (以上, 香川県教育センター 主席研究員) / 伊藤 裕康, 黒田 勉, 久保 直人 (以上, 香川大学教育学部)

<平成19年度>

(附属学校からの転出などにより20年度メンバーではなくなった教員のみを記載)

西川 健男 (以上, 附属高松小学校) / 櫻尾 由美子, 平野 和代, 植松 克友, 前 多恵, 永井 均, 沼野 生幸, 三浦 恵美子, 妹尾 美紀 (以上, 附属特別支援学校)

【資料】本調査において用いた質問紙調査用紙 ならびに 本報告の調査項目欄(抜粋)

香川大学教育学部 附属教育実践総合センター 研究プロジェクト
 『わかる授業』のための メディア活用に関する研究プロジェクト
 質問紙調査(プレ調査) ご協力をお願い

————— [A] 「わかる授業」について、先生の思い・お考え などをお聞かせください —————
 (※質問[A]群は「メディア活用」に限定した質問ではありません。一般的な教育実践をイメージしてお答えください。)

質問 A2 ■ 「わかる授業」が成立するための要素(児童生徒の状況・教師の教え方・学習環境の状況・教材 etc.) を、
 順序に関係なく、思いっただけ挙げてください。

(上に例示した以外の どんな内容・観点でもかまいません。ノブレンストーミングの要領で、やわらか頭でご回答ください。)

| | | |
|-----|------|------|
| (1) | (6) | (11) |
| (2) | (7) | (12) |
| (3) | (8) | (13) |
| (4) | (9) | (14) |
| (5) | (10) | (15) |

————— [B] 「メディア活用」に関して、先生の思い・お考え などをお聞かせください —————

本質問の『メディア(ICT)』とは、「テレビ、VTR又はDVDデッキ、CDラジカセ、OHP、デジタルカメラ、デジタルビデオカメラ、
 実物投影機(書画カメラ)、液晶プロジェクタ、パソコン、電子情報ボード、TV会議システム、インターネット」などを指します。

質問 B1 ■ メディア(ICT機器)に対するイメージについて、当てはまる箇所に○をつけてください。

| | | | | |
|---|--|----------------------------|--|---|
| | ど いち そ う 思 う | ど ち え と 思 う | ど ち う い ち 思 え ら わ か ば か な い | そ う い ち 思 え ら わ か ば か な い |
| ア | メディア(ICT)の授業での利用に興味がある | | | |
| イ | メディア(ICT)の設置や操作に不安がある | | | |
| ウ | メディア(ICT)を授業で使う自信がある | | | |
| エ | メディア(ICT)を使うのは手間がかかると感じる | | | |
| オ | メディア(ICT)を 授業で使いたいと思う | | | |
| カ | メディア(ICT)は 私にとって身近なものだと思う | | | |
| キ | メディア(ICT)を使えば、児童生徒がより「わかった」と 思ってもらえる授業になりそうだと思う | | | |
| ク | メディア(ICT)は 授業に活用しやすいと思う | | | |

質問 B2 ■ 下記のメディア(ICT機器)について、現時点で「授業に活用したことがある」「活用する自信がある」ものに●、
 「授業に活用した経験や自信はないが、自分の授業にも活用可能だろう」と思えるものに○、
 「自分の授業には活用しづらいだろう」と思われるものに△を、それぞれに(1~12 全てに)付けてください。

| | | | |
|-------------------|---------------|-----------------|---------------|
| 1. テレビ | 4. OHP | 7. 実物投影機(書画カメラ) | 10. 電子情報ボード |
| 2. VTR 又は DVD デッキ | 5. デジタルカメラ | 8. 液晶プロジェクタ | 11. TV 会議システム |
| 3. CD 等のラジカセ | 6. デジタルビデオカメラ | 9. パソコン | 12. インターネット |

(※質問紙調査用紙全体の原寸：A3 見開き又は A4 裏表)